

対面の別れ コロナ下でも

迫る

変わる葬儀の中で

遺族が穏やかな葬儀を
ひつきの回廊から由未のそ
きなでいた。制服姿の女
子が話しかけている。遠い
日に故人にかけてもらった
言葉が思い出したのだらう
か。10対はと離れたホール
の入り口にいても、この家
族の親密さがうかがえた。

3月のある日の午後、時
すぎ遺体安置施設「想送
庵カノ」(東京都葛飾区)
には、新型コロナウイルス
感染症とよくなった高齢男
性の家族が集まっていた。
遺族の強い希望で、翌日に
対面式の葬儀が行われると
いう。

東京都内ではコロナで亡
くなった人の遺族の多くは
「最後の別れ」ができない
でいる。厚生労働省などの
指針(2020年7月)で
は「遺体からの感染リスク

は低い」とし、葬儀などは
納体袋に入れて実施するこ
とを推奨。全国的には対面
式を廃止、葬儀が増えそ
る。だが、都内のほとん
どの火葬場は「全葬者同士
で感染する恐れがある」な
どの理由で対面を認めてお
らず、葬儀社は風評被害を
恐れ、慎重に故人と会え
ぬまま火葬されることが多
い。

一方、年始から準備をし
てきたカノは8月、対面
を望む遺族に場所を提供し

始めた。感染リスクを平
らに死後目録を準備する
のを待たず、さらには体袋に接
触感染しないよう対策を行
う。全土に上り、ひつきの遺
体も増える。準備期間も含め
約20件の利用があった。
「コロナであってもなく
ても」言うときは対面が
基本だと認めます。ひつき
のそばに葬まり、遺族は故
人と会話にならない会話
をする。そんな時間を大切
にしたいのです。カノ
の運営会社「あなたを忘れ

ない」の三好麻子社長(83)
は語る。
カノは19年10月の開業
当初から感染対策に取り
組んできた。安葬面に配慮
し遺体を安置すれば、遺族
はじっくり申すことができ
る。そして開業して1年後
の20年春、コロナ禍が起き
た。
未知の感染症が猛威を振
る。感染経路はわからず、
重症化すればあっけなく命
を落とす。コロナへの
恐怖が、カノの
葬儀の岡江美幸さんは4
月2日に相次いで亡くな
った。家族は火葬に立ちま
うことすらできなかった。

15歳愛娘の死をかけた



「ひつぎに入れる花は自宅でも市場に買いに行きます」と話す三村麻子
さん(東京都葛飾区)の遺体安置施設「想送庵カノ」にて4月6日、手塚新一郎撮影

この時期、都内ではコロ
ナとよくなった人の火葬の
施設と時間帯を限定したた
め「火葬待ち」の遺体が急
増した。そこで東京都が目
羽の矢を立てたのが最大20

体の保管ができるカノだ
った。同年9月から「病院
の共有霊柩室」という扱い
で船と契約した。
すぐに病院から遺体が運
び込まれた。思い立ってエ
リ科の花、カサランカで
ひつぎを埋めた。めどりも
できない遺族の苦しみを感
え、そのくらの対応は
当然と考えた。

三村さんには忘れられな
い光景がある。コロナの横
溝橋持持の、若い小柄な
女性の遺体。納体袋の透明
な部分から中を覗くとま
るく、袋が破損したところ
に開けられ、防虫剤を
着た三村さんらスタッフは
袋を開け、髪を抜き、遺体
を丁寧に拭き、髪を整え、

買って来た新しい口と一
スを着せた……。
医療器具をつけたままの
遺体などありえない。それ
だけコロナ対応で医療現場
が切迫していたのだらう。
病院を責めるつもりはな
い。ただ葬送に関わる者
は、遺族の急をもち遺族に
接する義務がある。その信
念が三村さんを突き動かし
た。

都の契約は3カ月で終
了したが、その後もカノ
にはコロナ関連の相談が続
いた。「どうしても会って
お別れしたい」。遺族の切
実な声にこたえるため、8月
風評被害の心配はあったも
の対面の場の提供に賛か
お返してまい。だが都
との契約で、納体袋は開け
てはならない。どうするか。
「一晩考え続けた。ふとひ
らめく。袋が破損したこ
とに気づいた。都の
了承も取り付け、防虫剤を
着た三村さんらスタッフは
袋を開け、髪を抜き、遺体
を丁寧に拭き、髪を整え、

送の現場にも持ち込まれ、
コロナではない遺族の葬儀
式でも「人数制限」「密
が禁止になっている。
「対面」にこだわる三村
さんの姿勢は時流とは正反
対だが、考えは変えな
ない。「例えは昭和という大袈裟な
時代を生き抜いてこられた
方々を見送るのに『密思
ひ』じゃなくて『密思
ひ』だと思います」
三村さんのこの強い思い
は、6年前に15歳の愛娘、
香織さんをがんて亡くし
たことにつながっている。
最後まで必死に生きようと

した娘は、亡くなる
前、こう言った。
「ママ、墓の
時間をかけてほしい」

取材・文
3面につ

変わる葬儀の中で 三村麻子さん

「メモリアルパーティー」の参加者は「なんと全葬儀の学園祭みたいだね」と言いつつ、この「勝子」を雑誌(画像)の一部を加えています。



長女は小さい頃から、ものを書くことが好きな娘だった。しかし小学4年のときの担任のひどい言葉に傷つき、その日から心を閉ざす。不登校になり、そのあと自殺未遂を繰り返す。医者にも掛かった。勝さんはずっと涙に目を合に続ける一方、「百死・自殺に引き合う僧侶の会」を知り、そのメンバーと2人で生まつらさを抱えながら、語り合う任意団体「ひとみ」を主宰してきた。だいたい娘は自ら命を閉じた。小説を書き始めていた。こ

迫る

「面からつづく」
葬儀業界にいた三村麻子(58)が母について深く考えるようになるきっかけは、娘の死だった。愛娘、香夏子さんは2016年秋、がんが15歳の命を閉じた。18歳と若くして4回の手術と抗がん剤治療を受け続けた。2年3カ月の闘病生活。ほとんどの時間を母と過ごした。その頃、娘が「死」や「母」について話していたことを折に触れて思い出す。
あれはとくなる力ほど前だった。香夏子さんは「ママ、私、お葬式ってどうも大事なことだってわかってちゃった」と言った。縁起でもない。母はうつろった。娘は気にならずに生きてきた。だってお葬式でこそ生まれて来なかった子にはできないんだから。生きるのに精いっぱいのはずが、人生の終わりを想像していた。考えをきいてあげて必ずに意味を見つけてほしいのだから。さらにこう言った。「ママ、お葬式は、その人が生きていたときと変わらないのよ」
なんと深い言葉なのだろう。15歳で死というものを正面から見つめていた。三村さんは今思い出してもそう感

ずしが好きだった。絵を描いた。写真を撮るのも好きだった。写真着たら。美は友達も多かった。その娘が以前こう言っていたのを思い出した。「葬式はみんなドレスアップして、そこに区別をつくらなくていいよ」
娘らしい言葉だと感じる。よし鼻を咥え、勝さんは三村さんに相談し、カンの部屋を4日間借りることにした。
当日、カンの隣の部屋に白ひつぎが置かれた。その横に、東京メトロ2号線に行ったときに撮った笑顔の



3回目の手術の前、京都に家族旅行したときの三村麻子さん(右)と香夏子さんのツーショット写真(2015年11月)(三村さん提供)

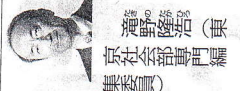
「時間をかけて弔う」

「ママ、この世で最高の愛情は、時間をかけることだよね」
ママが私のために時間をかけてくれるというのは、ママの命を削ってもらっているという。だから、私は十分に愛されている。娘はそう伝えなかったのかもしれない。
生きたように
娘が息をしなくなったとき、母は絶望し生きていく意味を失った。たった二つ生き永らえていく道があるとしたら、娘の思いを多くの人に伝えることこそ信じた。その人が生きたように葬儀はやる。「時間をかけることが愛情……」
80代、90代の戦争を体験した人の申しを「時短するなんて許されな」と思った。遺体を安置し遺族と対面し時間をかけて弔わなければ、借金をし看護学校でた連物を放棄して遺体安置施設にした。運営会社の「あなたを忘れない」は、まさに愛娘への思いだ。香夏子を送りたくない。だから施設を「カノ」と名付けた。
選送は社会の鏡、とよく言われ、日本の葬儀式も経済成長に合わせて大きく変化した。会葬者が数千人に上ることも多かった。ところがバブル崩壊後は一転、簡素化し期間も短縮されていく。さらにコロナ禍がその傾向に拍車をかける。近親者のみの家族葬が主流となり、葬儀をしない「直葬」、通夜を全く省略式だけを行う「一日葬」も珍しくなくなっている。
そうした世の流れに三村さんは異を唱えている。「遺族が遺体と長く過ごすことが本来の申しです。時短葬儀はおかしい」
カノの利用者は葬儀式前の数日をひたすら遺体と共に過ごす。故人に語り掛けたり、思い出を出し合ったり。美は若い孫世代がそうした葬儀感を望んでいると三村さんは感じている。あの中学生は無心に折り紙を折り続けた。それらを全部ひつまぐれ、晴れやかな表情になった。別の大学生は大好きな祖母のそば

娘の思い 多くの人に

写真やパネルにして飾った。隣の部屋が「思い出部屋」。好きなコスメのドレス、愛用のカメラ、壁につくられた棚には服や織りぐるみ、抽斗箱は高校の美術の先生が持ってきてくれた。みんなを飾りついでを始め、さながら高校の学園祭のようだった。
「生きる、語る場に訪れたのは娘と同じく生きつらさを抱えた人たちだった。リストカットの痕跡のある子もいた。その子たちが知らないなら、輪になって語り合おう。何時間でも、みんな本音で話した。隣の部屋に上った娘のひつぎがあったから、本音の言葉しかありなかった。その輪の中に親たちが入った。通っていた学校の教師も連日話し込んだ……」
もし「メモリアルパーティー」がなかったら、娘の仲間の子たちが抱える悲しい気持ちはどうなっていたのだろう。あるいは「時短」の普遍の葬儀式だったら、申う葬儀があったら、仲間たちは「生きる意味」についてどう語り合えた。裏方として「パーティー」を支えた三村さんは言う。「僕さんの苦しみを思い、そして母としての苦しみを抱えたまま、勝さんは全てをさらして命を削りながら申った。そうした真実があったら、部屋に来た子たちの顔は変わっていた。あのあとみんな「生きよう」として戻ったはずですよ」
社会全体に泣落ムドが漂う中、日本の葬儀式はこれからは簡素化と時短葬連なるだろう。三村さんもカノのような施設が主流になるとは考えない。それでも「時間をかけて弔う」という信念は変わらない。つい最近、利用者がら丁寧な手紙が届いた。人好きみなとの別れは本当に悲しいにですが、悲しみをかみくだく時間をつくることがいかに大切なのか、今回学んだように思います」
娘の思いが伝わった。それが三村さんにはうれしい。

今回の取材は



三村 隆子(東) 京社会部専門編集委員
1988年入社。連載コラム「櫻子」を担当。毎日新聞ウェブサイトでも連載「令和の申し」を始める。

ツイッター(@mainichistory)発信中です。執筆者の「ひと」と言を紹介しています。